

2017 年度国際ユース作文コンテスト

【子どもの部】 佳作

## 自然からのメッセージ

(原文)

山岡 真緒 (13 歳)

茨城県

霞ヶ浦高等学校附属中学校

のんびり外の景色を楽しむ。私はそんな時間が好きだ。まだ二つか三つの時、泥遊びに熱中した。小学校に上がると担任の先生が持ってくる花束に夢中になった。小学四年生で万葉集などの古典に惹かれ、草木を題材にした詩を作りはじめた。そして現在は自然を見て和歌や詩がひらめき、彼らの姿や言葉を文に表す事は習慣になった。ひとりっ子の私にとって自然は友達であり師であった。大事な事を教えてくれるのである。例えば、私が試験に合格できず落ち込んでいた時だ。ふと風にゆらいでいる木々を見て思った。

「私は受験という風にゆられていた。あの木も風にゆられながら日々枝を伸ばし続けている。

私だって今後もっと枝を伸ばす事ができるのではないだろうか。」

結果は駄目でも成長した。そんな事を自然は教えてくれたのだ。他にも命の儂さや落ち着いた空間を彼らは示してくれている。木々や動物、草花は私達と一緒に成長していき、それぞれの問題にぶつかる。当たり前の事だがこの共通点があるからこそ自然からのメッセージに耳をかたむけて感動することができるのだろう。

また彼らの世界は競争である。弱肉強食に土地や縄張りの奪い合いなど植物でさえ休まらない。何気ない空き地の雑草も壮絶な争いをして自らの種を残しているのだ。だからこそ彼らは語れるのだろう。

私は悩んでいる時カタクリを思い出す。カタクリは花期が終われば地上から姿を消して実をつける生活に入る。そのような植物は、spring ephemeral (春の儂い命) と呼ばれるという。また、カタクリは花立ちするのに何年もかかる上にとっても痛みやすい植物だ。そんなカタクリは泣き言を口にしていだろうか。現実逃避をしているだろうか。私より短い人生をしっかりと生きている。そう思うと悩むより先に動いて自分なりの実をつけようと考えられるようになる。私にとってカタクリは残された時間の中でひたむきに部活を頑張る先輩みたいだ。そんな風に私に伝えてくれる。

それから、彼らのメッセージや教えはやわらかい。どんな形にも対応できる。感じ方はその人にゆだねられるのだ。例えば、つばめを見てがむしゃらに生きようと感じる人もいだろうし、しなやか

に羽ばたこうとを感じる人もいるだろう。自然からのメッセージは、自分に一番なじむ形で心に留めておくことができるのである。

私達の地球では近年自然の減少や破壊が問題になっている。自然を失う事は学びの場を失っていくようなものだろう。彼らの多種多様な教えやメッセージを自由に感じ、言葉にできるのは私達人間だけなのだ。そういった使命感を心に抱きながら、自然との共存について考えていきたい。

風がふく 明日もここに風がふく

私は <sup>あした</sup>明日 ここから進む (短歌)